

乳幼児の保護者から中学校卒業者の保護者

アンケート（こどもや保護者の特性等）に関する考察

こどもや保護者の特性と子育てに関する悩みの相談の状況

～子育ての孤立を防ぐための支援方法の検討～

松尾 理沙（沖縄大学人文学部こども文化学科 准教授）

はじめに

発達のご案内になるこどもに対する、早期発見・早期支援の必要性は大分周知され、発達障害者支援法が成立し、特別支援教育の取り組みなどにおいても児だけでなく、家族を支援する事が明記されている。一方、近年では「ワンオペ育児」（藤田,2017）という言葉が流行り、一人で育児を担っている状態という言葉が一般化され、育児負担が大きくても、なかなか相談につながらず保護者の子育ての孤立が窺える。子育ての孤立に関しては、虐待のリスク要因でもあり、早急に対応を検討しなければならない。また、こどもの発達特性や発達障害との関連から保護者の育児ストレスが高まることも言われており、こどもの育てにくさ、それによる不適切な養育、虐待へとつながることもある。こどもの発達の特性を早期に捉えられず、適切に対応されなかったことで問題が大きくなり、就学期において明らかになったケースも多くある。これらは、保護者だけの責任を問うのではなく、社会全体の支援として在り方が問われている。

本論では「沖縄市こどもの生活等に関する調査」の結果より、保護者がとらえるこどもの発達特性、こどもに対する悩み、相談の有無、保護者自身の特性などを分析することで、こどもやその保護者の悩みやその相談の状況について精査した。また、その状況に応じて、発達期において今後、どのようなサポートやサービスが必要なのか検討を行った。

方法

1. 対象

2018年度に沖縄市が実施した「沖縄市こどもの生活等に関する調査」にて、未就学児の保護者を対象とした「乳幼児の保護者の皆様へ」、小学生児の保護者を対象とした「小学生の保護者の皆様へ」、中学生児の保護者を対象とした「中学生の保護者の皆様へ」、中学校を卒業した児の保護者を対象とした「中学校を卒業した方の保護者の皆様へ」の児の保護者用4種類と中学生本人を対象とした「中学生の皆様へ」、中学校を卒業した本人を対象とした「中学校を卒業した皆様へ」の本人用2種類の回答を分析対象とし、回答のうち無記入、無回答を省いたデータを基に分析を行った。

2. 分析方法

保護者用、本人用共に設定されている質問項目「あなたは、A～Hについて、どのくらいあてはまりますか。それぞれのあてはまる選択肢1つに○をつけてください。『A 新しい場所や場面が苦手である』、『B 人と話すことが苦手である』、『C 文章の読み書きが難しい』、『D 人の話を集中して聞くことが苦手である』、『E イライラしてどうにもならないことがある』、『F 体を動かすことが苦手である』、『G 工作など細かな作業が苦手である』、『H 計算が苦手である』に対して、「とても、あてはまる」「だいたい、あてはまる」「あまり、あてはまらない」、「まったく、あてはまらない」の4件法での回答を求めたものであった。分析にあたって、「とても、あてはまる」「だいたい、あてはまる」との回答を「あてはまる」とし、「あまり、あてはまらない」、「まったく、あてはまらない」との回答を「あてはまらない」の2カテゴリーとし、他の質問項目のカテゴリーでの分割表を作成し分析を行った。群間有意差検定には、カイ二乗検定あるいはFisherの正確確率検定を用いた。分析はすべてSPSS22を用いて行った。

結果

1. 乳幼児期の子どもをもつ保護者

1) 0歳児の子どもをもつ保護者

0歳の子の子育てをしている方の中で、保護者が「育児に自信が持てない」と回答している中で、「子どもの育てにくさを感じない」、もしくは「何ともいえない」と回答している方が多かった(表1)。

表1 育児に自信が持てないことと子どもの育てにくさの状況(人)

		子どもに対して、育てにくさを感じていますか			合計 (人)
		いつも感じる	時々感じる	感じない	
育児に自信 がもてない ことがありますか	はい	2(人)	29(人)	50(人)	81(人)
	いいえ	0(人)	5(人)	56(人)	61(人)
	何ともいえない	0(人)	19(人)	72(人)	91(人)
合計		2(人)	53(人)	178(人)	233(人)

0歳の子の子育てをしている方の中で、保護者が「子どもを虐待しているのではないかと考えることがある」と回答している方が、「子どもの育てにくさを感じない」と回答している方が多かった(表2)。

表2 虐待しているのではないかと思うこととこどもの育てにくさの状況(人)

		こどもに対して、育てにくさを感じていますか			合計 (人)
		いつも感じる	時々感じる	感じない	
こどもを虐待している のではないかと思うこと がありますか	はい	1(人)	5(人)	3(人)	8(人)
	いいえ	0(人)	40(人)	168(人)	208(人)
	何とも言えない	1(人)	8(人)	8(人)	17(人)
合計		2(人)	53(人)	178(人)	233(人)

2)3 歳～6 歳のこどもをもつ保護者

(1) こどもについての悩みとこどもの特性

こどもについての悩みとして、「こどものしつけや教育に自信が持てない」「こどもの身体の発育や病気が心配である」「こどもが反抗的で、なかなか言うことを聞かない」「こどもに基本的な生活習慣が身につかない」があるといずれかに回答した方のこどもの特性の状況を分析し、有意差が認められたもののみ記した(表3)。

幼児期においてこどもの特性は、身体の発育や病気などの影響によるものかという悩みに繋がっていた。こどもの特性をわがまま、反抗的で保護者の指示が入りにくいと捉え、子育ての悩みとなっていた。こどもの特性が保護者のしつけや教育などの育児に対する自信を失いやすく、効力感を下げてしまっていた。外出の時、手を離すとすぐにどこかへ行ってしまうということと基本的な生活習慣が身についていないということのみの関係はみられなかった。

表3 こどもについての悩みとこどもの特性の状況

	こどもの特性	カイ二乗値(自由度), p 値,有意差
こどものしつけや教育に自信が持てない	友達と集団で遊ぶことができない	5.50(1), 0.26, *
	他のこどもたちと、おもちゃなどを貸し借りすることができない	18.40(1), 0.000, ***
	カッとなったり、かんしゃくをおこしたりすることがよくある	18.93(1), 0.000, ***
	一人でいるのが好き、一人で遊ぶことが多い	10.18(1), 0.003, **
	絵本の読み聞かせや、大人の話をよく聞くことができない	50.62(1), 0.000, ***

	目線があまりあわない	20.33(1), 0.000, ***
	ふだん通りの状況や手順が急に変わると混乱する	9.34(1), 0.004, **
	外出の時、手を離すとすぐにどこかに行ってしまう	51.66(1), 0.000, ***
	すぐに気が散りやすく、注意を集中できない	52.59(1), 0.000, ***
こどもの発育や病気が心配である	友達と集団で遊ぶことができない	44.61(1), 0.000, ***
	他のこどもたちと、おもちゃなどを貸し借りすることができない	42.94(1), 0.000, ***
	カッとなったり、かんしゃくをおこしたりすることがよくある	8.14(1), 0.006, **
	一人でいるのが好き、一人で遊ぶことが多い	34.29(1), 0.000, ***
	絵本の読み聞かせや、大人の話をよく聞くことができない	82.38(1), 0.000, ***
	目線があまりあわない	42.77(1), 0.000, ***
	ふだん通りの状況や手順が急に変わると混乱する	39.74(1), 0.000, ***
	外出の時、手を離すとすぐにどこかに行ってしまう	19.22(1), 0.000, ***
すぐに気が散りやすく、注意を集中できない	45.93(1), 0.000, ***	
こどもが反抗的で、なかなか言うことを聞かない	友達と集団で遊ぶことができない	5.29(1), 0.027 *
	他のこどもたちと、おもちゃなどを貸し借りすることができない	21.72(1), 0.000, ***
	カッとなったり、かんしゃくをおこしたりすることがよくある	93.02(1), 0.000, ***
	一人でいるのが好き、一人で遊ぶことが多い	13.34(1), 0.001, **
	絵本の読み聞かせや、大人の話をよく聞くことができない	42.85(1), 0.000, ***
	目線があまりあわない	5.21(1), 0.047, *
	ふだん通りの状況や手順が急に変わると混乱する	29.40(1), 0.000, ***
	外出の時、手を離すとすぐにどこかに行ってしまう	61.67(1), 0.000, ***
すぐに気が散りやすく、注意を集中できない	41.86(1), 0.000, ***	
こどもに基本的な生活習慣が身につかない	友達と集団で遊ぶことができない	12.21(1), 0.000, ***
	他のこどもたちと、おもちゃなどを貸し借りすることができない	18.25(1), 0.000, ***
	カッとなったり、かんしゃくをおこしたりすることがよくある	14.86(1), 0.000, ***
	一人でいるのが好き、一人で遊ぶことが多い	51.13(1), 0.000, ***
	絵本の読み聞かせや、大人の話をよく聞くことができない	20.25(1), 0.000, ***

	目線があまりあわない	3.93(1), 0.054, †
	ふだん通りの状況や手順が急に変わると混乱する	18.72(1), 0.000, ***
	すぐに気が散りやすく、注意を集中できない	9.80(1), 0.02, **
	抱っこされるのを嫌がる	18.54(1), 0.000, ***

(2) こどもの特性と専門家への相談の有無

こどもの各特性に対して、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と回答した方が、保育園の先生や役所の相談窓口にご相談したかどうかの状況を分析した。有意差が認められたもののみ記した(表4)。乳幼児期においては、こどもの気になるそれぞれの特性が見られた時には、相談につながっていた。

表4 こどもの特性と相談有無の状況

	こどもの特性	カイ二乗値(自由度),p 値, 有意差
相談した	友達と集団で遊ぶことができない	27.80(1), 0.000, ***
	他の子どもたちと、おもちゃなどを貸し借りすることができない	18.35(1), 0.000, ***
	カッとなったり、かんしゃくをおこしたりすることがよくある	4.43(1), 0.045, *
	一人でいるのが好き、一人で遊ぶことが多い	18.22(1), 0.000, ***
	絵本の読み聞かせや、大人の話をよく聞くことができない	19.60(1), 0.000, ***
	目線があまりあわない	24.19(1), 0.000, ***
	ふだん通りの状況や手順が急に変わると混乱する	37.28(1), 0.000, ***
	外出の時、手を離すとすぐにどこかに行ってしまう	3.40(1), 0.068, †
	すぐに気が散りやすく、注意を集中できない	9.52(1), 0.002, **

(3) こどもの特性とこどもの所属の有無

こどもが保育所(園)や幼稚園に通っていないと回答している方と、こどもの所属がある場合と、こどもの特性との状況を分析した。このことから、こどもの所属がないと回答している方のこどもの特性として「カッとなったり、かんしゃくをおこしたりすることがよくある」と回答していることが有意に多いことが明らかとなった($\chi^2(1)=4.88, p<.05$)。加えて、こどもの所属がないと回答している方のこどもの特性として「一人でいるのが好き、一人で遊ぶことが多い」と回答していること ($\chi^2(1)=5.49, p<.05$)、「絵本の読み聞かせや、大人の話をよく聞くことができない」と回答していること($\chi^2(1)=5.87, p<.05$)が有意に多いことが明らかとなった。

(4) こどもの特性と相談できる相手の有無

こどもの特性とこどもについて悩んでいることを「相談相手がない」もしくは「だれにも相談したくない」と回答していることとの状況を分析した。有意差が認められたもののみ記した。

こどもの特性として「一人でいるのが好き、一人で遊ぶことが多い」と回答している方が、こどもについて悩んでいることを「相談相手がない」、もしくは「だれにも相談したくない」と回答していることが有意に多いことが明らかとなった($\chi^2(1)=4.92, p<.05$)。また、「外出の時、手を離すとすぐにどこかに行ってしまう」と回答している方も同様にこどもについて悩んでいることを「相談相手がない」、もしくは「だれにも相談したくない」と回答していることが有意に多いことが明らかとなった($\chi^2(1)=4.52, p<.10$)。

3) 保護者の特性とその影響

(1) 保護者の特性とこのことについての相談の有無

保護者の各特性に対して、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と回答した方が、役所の相談窓口相談したかどうかの状況を分析した。有意差が認められたもののみ記した。保護者自身が「人の話を集中して聞くことが苦手である」と回答している方が、そのことについて役所などの相談窓口相談することが有意に少ないことが明らかとなった($\chi^2(1)=11.57, p<.05$)。一方、保護者自身が「感情をおさえられないことがある」と回答している方が、そのことについて役所などの相談窓口相談することが有意に多いことが明らかとなった($\chi^2(1)=13.46, p<.001$)。

(2) 保護者の特性と子どもの特性についての相談の有無

保護者の各特性に対して、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と回答した方が、自身のこどもの各特性に対して、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と回答した場合に相談をしたかどうかの状況を分析した。有意差が認められたもののみ記した。保護者自身が「文章の読み書きの難しさは感じていない」と回答している方が、こどもに育てにくさがあった場合「保育園の先生や役所の相談窓口相談している」と回答していることが有意に多いことが明らかとなった($\chi^2(1)=3.59, p<.10$)。保護者自身が「感情をおさえられないことがある」と回答している方が、子どもに育てにくさがあった場合「保育園の先生や役所の相談窓口相談している」と回答していることが有意に多いことが明らかとなった($\chi^2(1)=4.50, p<.05$)。

(3) 保護者の特性とこどもについて悩んでいることを相談できる相手の有無

保護者の各特性に対して、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と回答した方が、こどもについて悩んでいることを「相談相手がない」もしくは「だれにも相談したくない」と回答していることとの状況を分析した。有意差が認められたもののみ記した。

保護者自身が「新しい場所や場面が苦手である」と回答している方 ($\chi^2(1)=3.54, p<.10$)、「感情をおさえられないことがある」と回答している方($\chi^2(1)=8.98, p<.01$)、「計算が苦手である」と回答している方($\chi^2(1)=3.47, p<.10$)が、こどもについて悩んでいることを「相談相手がいない」、もしくは「だれにも相談したくない」と回答していえることが有意に多いことが明らかとなった。

2. 小学生のこどもをもつ保護者

1) こどもについて

(1) こどもについての悩みとこどもの特性

こどもについての悩みとして、「こどものしつけや教育に自信が持てない」「こどもの身体の発育や病気が心配である」「こどもが反抗的で、なかなか言うことを聞かない」「こどもに基本的な生活習慣が身につかない」があるといずれかに回答した方のこどもの特性の状況を分析した。有意差が認められたもののみ記した(表 5)。

「文章の読み書きが難しい」「感情をおさえられないことがある」など学業や対人関係に関するこどもの特性がある場合は、保護者のこどものしつけや教育について悩みがあることが分かった。「体を動かすことが苦手である」「人と話すことが苦手である」など、体の不器用さや対人関係の持ちづらさのこどもの特性がある場合には、健康や発育が心配になっていることが分かった。「人と話すことが苦手である」「文章の読み書きが難しい」「工作など細かな作業が苦手である」など様々なこどもの特性がある場合、こどもが反抗的で指示が通りにくいと悩みがあることが分かった。「新しい場所や場面が苦手である」「人と話すことが苦手である」など対人関係の構築に関わることが苦手な特性をこどもが持つ場合には、基本的な生活習慣が身に付いていないと悩みに繋がっていることが分かった。

表 5 こどもについての悩みとこどもの特性の状況

	こどもの特性	カイ二乗値(自由度), p 値,有意差
こどものしつけや教育に自信が持てない	文章の読み書きが難しい	4.10(1), 0.053, †
	人の話を集中して聞くことが苦手である	20.54(1), 0.000, ***
	感情をおさえられないことがある	25.30(1), 0.000, ***
	工作など細かな作業が苦手である	5.21(1), 0.029, *
	計算が苦手である	14.02(1), 0.001, **
こどもの健康や発育が心配である	人の話を集中して聞くことが苦手である	6.82(1), 0.014, *
	感情をおさえられないことがある	3.14(1), 0.086, †
	体を動かすことが苦手である	19.45(1), 0.000, ***
	計算が苦手である	9.35(1), 0.006, **

こどもが反抗的で、 なかなか言うことを 聞かない	人と話すことが苦手である	3.48(1), 0.074, †
	文章の読み書きが難しい	13.55(1), 0.001, **
	人の話を集中して聞くことが苦手である	22.17(1), 0.000, ***
	感情をおさえられないことがある	101.04(1), 0.000, ***
	工作など細かな作業が苦手である	5.08(1), 0.029, *
	計算が苦手	4.39(1), 0.0057, †
こどもに基本的な生活習 慣が身につけていない	新しい場所や場面が苦手である	7.97(1), 0.006, **
	人と話すことが苦手である	23.31(1), 0.000, ***
	文章の読み書きが難しい	15.50(1), 0.000, ***
	人の話を集中して聞くことが苦手である	32.35(1), 0.000, ***
	体を動かすことが苦手である	9.71(1), 0.004, **
	工作など細かな作業が苦手である	20.68(1), 0.000, ***
	計算が苦手である	29.70(1), 0.000, ***

(2) こどもの特性と相談できる相手の有無

こどもの特性とこどもについて悩んでいることを「相談相手がない」もしくは「だれにも相談したくない」と回答していることとの状況を分析した。有意差が認められたもののみ記した(表 6)。人と話すこと、聞くこと等対人関係に関わる特性に対して相談相手がないことと、粗大運動、微細運動の特性に対して相談相手がないことが有意に多いことが明らかとなった。

表 6 こどもの特性と相談できる相手の有無の状況

	こどもの特性	カイ二乗値(自由度),p 値, 有意差
相談できる 相手がない	人と話すことが苦手である	12.72(1), 0.001, **
	人の話を集中して聞くことが苦手である	18.42(1), 0.001, **
	体を動かすことが苦手である	4.70(1), 0.0049, *
	工作など細かな作業が苦手である	5.21(1), 0.044, *

(3) こどもの特性と専門家への相談の有無

こどもの各特性に対して、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と回答した方が、学校の先生や役所の相談窓口にご相談したかどうかの状況を分析した。有意差が認められたもののみ記した(表 7)。文字の読み書き、話を聞くことができるなど学業に関する事、また、学校や家庭などでの社会性に関わる感情をコントロールすることについて困り感がある場合、相談につながりやすいが、「新しい場所や場面が苦手である」「人と話すことが苦

手である」「体を動かすことが苦手である」「工作など細やかな作業が苦手である」ということに関しては、あまり相談に繋がりにくい。

表7 こどもの特性と相談有無の状況

	こどもの特性	カイ二乗値(自由度),p 値, 有意差
相談した	文章の読み書きが難しい	14.11(1), 0.000, ***
	人の話を集中して聞くことが苦手である	25.80(1), 0.000, ***
	感情をおさえられないことがある	26.85(1), 0.000, ***
	計算が苦手	4.71(1), 0.039, *

(4) こどもの特性とこどもの学校生活の状況

「お子さんは、学校生活についてどのように思っていますか。」の問いに対して、「楽しい」「どちらかと言えば楽しい」「どちらかと言えば楽しくない」「楽しくない」「わからない」の5件法で回答を求めた。「楽しい」「どちらかと言えば楽しい」は「楽しい」、「どちらかと言えば楽しくない」「楽しくない」は「楽しくない」、「わからない」の3つのカテゴリで分析を行った。有意差が認められたもののみ記した(表8)。こどもが「工作など細やかな作業が苦手である」の特性以外である、新規場面の苦手さや感情コントロール、学習の苦手さ、運動の苦手さがある場合には学校の充実度に直結することが明らかであった。

表8 こどもの特性とこどもの学校生活の状況

	こどもの特性	カイ二乗値(自由度),p 値, 有意差
学校生活の状況が楽しくない	新しい場所や場面が苦手である	16.67(2), 0.000, ***
	人と話すことが苦手である	31.09(2), 0.000, ***
	文章の読み書きが難しい	8.29(2), 0.016, *
	人の話を集中して聞くことが苦手である	6.34(2), 0.042, *
	感情をおさえられないことがある	22.74(2), 0.000, ***
	体を動かすことが苦手である	10.29(2), 0.006, **
	計算が苦手である	6.86(2), 0.032, *

2) 保護者について

(1) 保護者の特性とそのことについての相談の有無

保護者の各特性に対して、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と回答した方が、役所の相談窓口にご相談したかどうかの状況を分析した。有意差が認められたもののみ記した。保護者自身が「人の話を集中して聞くことが苦手である」と回答している方($\chi^2(1)=4.21, p<.10$)、「感情をおさえられないことがある」と回答している方($\chi^2(1)=4.10, p<.10$)、「計算が苦手である」と回答している方($\chi^2(1)=4.71, p<.05$)が、そのことについて役所などの相談窓口にご相談することが有意に多いことが明らかとなった。

(2) 保護者の特性と子どもの特性についての相談の有無

保護者の各特性に対して、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と回答した方が、自身のこどもの各特性に対して、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と回答した場合に相談をしたかどうかの状況を分析した。有意差が認められたもののみ記した(表 9)。

保護者自身が「文章の読み書きが難しい」、「人の話を集中して聞くことが苦手である」「感情をおさえられないことがある」「体を動かすことが苦手である」「計算が苦手である」の特性を抱えている場合、こどもの支援ニーズに対して相談に繋がりやすいことが有意に明らかとなった。

表 9 保護者の特性とこどもの特性についての相談の有無

	保護者の特性	カイ二乗値(自由度), p 値,有意差
こどもの特性について 相談した	文章の読み書きが難しい	3.45(1), 0.072, †
	人の話を集中して聞くことが苦手である	7.45(1), 0.009, **
	感情をおさえられないことがある	11.31(1), 0.001, **
	体を動かすことが苦手である	6.92(1), 0.0011, *
	計算が苦手である	6.77(1), 0.013, *

(3) 保護者の特性とこどもについて悩んでいることを相談できる相手の有無

保護者の各特性に対して、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と回答した方が、こどもについて悩んでいることを「相談相手がない」もしくは「だれにも相談したくない」と回答していることとの状況を分析した。有意差が認められたもののみ記した。

保護者自身が「新しい場所や場面が苦手である」「人と話すことが苦手である」「人の話を集中して聞くことが苦手である」など対人関係の構築・維持が苦手である特性、「体を動かすことが苦手である」「工作など細かな作業が苦手である」など粗大運動、微細運動が苦手である特性を持っていると子育てに対する悩みを相談しづらいと回答している方が有意に多いことが明らかとなった。

表 10 保護者の特性と子どもについての悩みを相談できる相手の有無

	保護者の特性	カイ二乗値(自由度),p 値, 有意差
相談 相手 が い ない	新しい場所や場面が苦手である	3.49(1), 0.073, †
	人と話すことが苦手である	12.72(1), 0.001, **
	人の話を集中して聞くことが苦手である	18.42(1), 0.001, **
	体を動かすことが苦手である	4.70(1), 0.049, *
	工作など細かな作業が苦手である	5.21(1), 0.044, *

3. 中学生の子どもをもつ保護者

1) 子どもについて

(1) 子どもについての悩みと子どもの特性

子どもについての悩みとして、「子どものしつけや教育に自信が持てない」「子どもの健康や発達が心配である」「子どもに基本的な生活習慣が身につかない」「子どもが良い友人関係を持つことができない」があるといずれかに回答した方の子どもの特性の状況を分析した。有意差が認められたもののみ記した(表 11)。

新規場面の苦手さや人の話を聞くことの苦手さ、感情がおさえられないことがあるなどの対人場面の構築・維持に関わる子どもの特性があると保護者はしつけや教育の悩みに繋がっていることが分かった。読み書き計算、粗大微細運動など学業に関わる子どもの特性があると保護者は基本的な生活習慣が身につけていないと悩みを持つことが分かった。新規場面の苦手さ、人とのコミュニケーション(話すこと、聞くことを含む)、感情のコントロールに苦手さの子どもの特性があると良い友人関係が作れていないと悩みを持つことが分かった。

表 11 子どもについての悩みと子どもの特性の状況

	子どもの特性	カイ二乗値(自由度), p 値,有意差
信 が 持 て な い	新しい場所や場面が苦手である	5.39(1), 0.023, *
	人の話を集中して聞くことが苦手である	10.69(1), 0.004, **
	感情をおさえられないことがある	20.52(1), 0.000, ***
達 が 心 配 で あ る	人の話を集中して聞くことが苦手である	5.29(1), 0.041, *
	感情を抑えられないことがある	12.18(1), 0.002, **
	体を動かすことが苦手である	3.87(1), 0.059, †

こどもに基本的な生活習慣が身につけていない	文章の読み書きが難しい	17.13(1), 0.000, ***
	人の話を集中して聞くことが苦手である	26.08(1), 0.000, ***
	感情を抑えられないことがある	14.78(1), 0.001, **
	体を動かすことが苦手である	6.58(1), 0.0016, *
	工作など細かな作業が苦手である	19.23(1), 0.000, **
	計算が苦手である	14.39(1), 0.001, **
こどもが良いい友人関係を持つことができない	新しい場所や場面が苦手である	13.46(1), 0.001, **
	人と話すことが苦手である	36.28(1), 0.000, ***
	人の話を集中して聞くことが苦手である	6.64(1), 0.0017, *
	感情を抑えられないことがある	14.41(1), 0.001, **

(2) こどもの特性と相談できる相手の有無

こどもの特性とこどもについて悩んでいることを「相談相手がない」もしくは「だれにも相談したくない」と回答していることとの状況を分析した。有意差が認められたもののみ記した(表 12)。こどもの特性として新規場面の苦手さ、読み書き計算の苦手さ、感情のコントロールの苦手さがある場合、相談相手がないことが有意に多いことが明らかとなった。

表 12 こどもの特性と相談できる相手の有無の状況

	こどもの特性	カイ二乗値(自由度),p 値, 有意差
相談できる相手がない	新しい場所や場面が苦手である	7.92(1), 0.0007, **
	文章の読み書きが難しい	13.82(1), 0.002, **
	人の話を集中して聞くことが苦手である	14.99(1), 0.001, **
	感情を抑えられないことがある	14.69(1), 0.001, **
	計算が苦手である	4.24(1), 0.064, †

(3) こどもの特性と専門家への相談の有無

こどもの各特性に対して、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と回答した方が、学校の先生や役所の相談窓口にご相談したかどうかの状況を分析した。有意差が認められたもののみ記した。こどもの特性として「人と話すことが苦手である」と回答している方 ($\chi^2(1)=10.93, p<.01$)、「人の話を集中して聞くことが苦手である」と回答している方 ($\chi^2(1)=6.14, p<.05$)が、学校の先生や役所の相談窓口などに相談したことがあると回答していることが有意に多いことが明らかとなった。

2) 保護者について

(1) 保護者の特性とそのことについての相談の有無

保護者の各特性に対して、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と回答した方が、役所の相談窓口にご相談したかどうかの状況を分析した。有意差が認められたもののみ記した。保護者自身が「計算が苦手である」と回答している方がそのことについて役所などの相談窓口にご相談することが有意に少ないことが明らかとなった($\chi^2(1)=3.24, p<.10$)。

(2) 保護者の特性と子どもの特性についての相談の有無

保護者の各特性に対して、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と回答した方が、自身のこどもの各特性に対して、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と回答した場合に相談をしたかどうかの状況を分析した。有意差が認められたもののみ記した。

保護者自身が「感情をおさえられないことがある」と回答している方($\chi^2(1)=3.80, p<.10$)、「体を動かすことが苦手である」と回答している方($\chi^2(1)=3.89, p<.10$)が、こどもに育てにくさがあった場合「学校の先生や役所の相談窓口にご相談している」と回答していることが有意に多いことが明らかとなった。

(3) 保護者の特性とこどもについて悩んでいることを相談できる相手の有無

保護者の各特性に対して、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と回答した方が、こどもについて悩んでいることを「相談相手がない」もしくは「だれにも相談したくない」と回答していることとの状況を分析した。有意差が認められたもののみ記した。

保護者自身が「感情を抑えられないことがある」と回答している方が、こどもについて悩んでいることを「相談相手がない」、もしくは「だれにも相談したくない」と回答していることが有意に多いことが明らかとなった($\chi^2(1)=5.99, p<.05$)。

4. 中学校を卒業した方の保護者

1) こどもについて

(1) こどもについての悩みとこどもの特性

こどもについての悩みとして、「こどもの健康や発達が心配である」「こどもに基本的な生活習慣が身につかない」があるといずれかに回答した方のこどもの特性の状況を分析した。有意差が認められたもののみ記した(表 13)。

人の話を聞くことの苦手さ、感情をおさえられないことがあるなどの対人場面の構築・維持に関わるこどもの特性があると保護者は健康や発達が心配になったり、基本的な生活習慣が身に付いていないと捉えたりすることが有意に多いことが明らかとなった。

表 13 こどもについての悩みとこどもの特性の状況

	こどもの特性	カイ二乗値(自由度),p 値, 有意差
こどもの健康や発達が心配である	人と話すことが苦手である	3.70(1), 0.074, †
	文章の読み書きが難しい	18.13(1), 0.000, ***
	人の話を集中して聞くことが苦手である	7.79(1), 0.011, *
	感情を抑えられないことがある	21.34(1), 0.000, ***
	体を動かすことが苦手である	9.49(1), 0.004, **
	工作など細かな作業が苦手である	13.11(1), 0.002, **
	計算が苦手である	11.59(1), 0.0003, **
こどもにも基本的な生活習慣が身についていない	新しい場所や場面が苦手である	8.20(1), 0.006, **
	人と話すことが苦手である	23.37(1), 0.000, ***
	人の話を集中して聞くことが苦手である	37.70(1), 0.000, ***
	感情を抑えられないことがある	19.07(1), 0.000, ***
	体を動かすことが苦手である	3.36(1), 0.072, †
	計算が苦手である	8.50(1), 0.006, **

(2) こどもの特性と相談できる相手の有無

こどもの特性とこどもについて悩んでいることを「相談相手がない」もしくは「だれにも相談したくない」と回答していることとの状況を分析した。有意差が認められたもののみ記した(表 14)。こどもの特性として、文章の読み書き、計算などの学業面の苦手さや運動面(粗大・微細)の苦手さがある場合に相談相手がないことが有意に多いことが明らかとなった。

表 14 こどもの特性と相談できる相手の有無の状況

	こどもの特性	カイ二乗値(自由度),p 値, 有意差
相談できる相手がない	文章の読み書きが難しい	5.52(1), 0.032, *
	人の話を集中して聞くことが苦手である	9.95(1), 0.007, **
	体を動かすことが苦手である	13.38(1), 0.001, **
	工作など細かな作業が苦手である	7.08(1), 0.014, *
	計算が苦手である	2.96(1), 0.095, †

(3) こどもの特性と専門家への相談の有無

こどもの各特性に対して、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と回答した方が、学校の先生や役所の相談窓口にご相談したかどうかの状況を分析した。有意差が認められたもののみ記した(表 15)。こどもの特性として「人と話すことが苦手である」と回答している方($\chi^2(1)=10.93, p<.01$)、「人の話を集中して聞くことが苦手である」と回答している方($\chi^2(1)=6.14, p<.05$)が、学校の先生や役所の相談窓口などに相談したことがあると回答していることが有意に多いことが明らかとなった。

表 15 こどもの特性と相談有無の状況

	こどもの特性	カイ二乗値(自由度),p 値, 有意差
相談した	新しい場所や場面が苦手である	3.39(1), 0.080, †
	人と話すことが苦手である	3.39(1), 0.030, †
	文章の読み書きが難しい	13.68(1), 0.001, **
	人の話を集中して聞くことが苦手である	36.59(1), 0.000, ***
	感情を抑えられないことがある	26.44(1), 0.000, ***
	計算が苦手である	19.41(1), 0.000, ***

2) 保護者について

(1) 保護者の特性とそのことについての相談の有無

保護者の各特性に対して、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と回答した方が、役所の相談窓口にご相談したかどうかの状況を分析した。有意差が認められたもののみ記した。保護者自身が「計算が苦手である」と回答している方がそのことについて役所などの相談窓口にご相談することが有意に多いことが明らかとなった($\chi^2(1)=12.1, p<.01$)。

(2) 保護者の特性と子どもの特性についての相談の有無

保護者の各特性に対して、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と回答した方が、自身のこどもの各特性に対して、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と回答した場合に相談をしたかどうかの状況を分析した。有意差が認められたものはなかった。

(3) 保護者の特性とこどもについて悩んでいることを相談できる相手の有無

保護者の各特性に対して、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と回答した方が、こどもについて悩んでいることを「相談相手がない」もしくは「だれにも相談したくない」と回答していることとの状況を分析した。有意差が認められたもののみ記した。

保護者自身が、新規場面の苦手さ、人の話を聞いたり人と話したりするような対人スキ

ルの苦手さ、感情のコントロール、また読み書き計算の苦手さや運動面の苦手さ(粗大・微細)などがある場合、こどもの悩みを相談することがしにくいと回答していることが有意に多いことが明らかとなった。

表 16 保護者の特性とこどもについての悩みを相談できる相手の有無

	保護者の特性	カイ二乗値(自由度),p 値, 有意差
相談 相手 が い ない	新しい場所や場面が苦手である	5.39(1), 0.027, *
	人と話すことが苦手である	10.10(1), 0.0020, **
	文章の読み書きが難しい	7.84(1), 0.012, *
	人の話を集中して聞くことが苦手である	7.92(1), 0.015,*
	感情を抑えられないことがある	10.51(1), 0.004, **
	体を動かすことが苦手である	7.22(1), 0.012,*
	工作など細かな作業が苦手である	9.75(1), 0.005, **
	計算が苦手である	6.94(1), 0.017,*

5. 中学生本人

1) 本人のとらえている特性とそのことに対する専門家への相談の有無

本人の捉えている各特性に対して、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と回答した方が、学校の先生や役所の相談窓口で相談したかどうかの状況を分析した。有意差が認められたもののみ記した。本人が「計算が苦手である」と回答している方が、「学校の先生や役所の相談窓口などに相談したことがある」と回答していることが有意に多いことが明らかとなった($\chi^2(1)=7.50, p<.01$)。

2) 本人の捉えている特性と学校生活の状況

「あなたは、学校生活についてどのように思っていますか。」の問いに対して、「楽しい」「どちらかと言えば楽しい」「どちらかと言えば楽しくない」「楽しくない」の4件法で回答を求めた。「楽しい」「どちらかと言えば楽しい」は「楽しい」、「どちらかと言えば楽しくない」「楽しくない」は「楽しくない」、の2つのカテゴリーで分析を行った。有意差が認められたもののみ記した(表 17)。

新規場面の苦手さ、対人関係の構築・維持に関わるスキル、感情のコントロール、運動面などに苦手さなどがある場合、学校生活が楽しくないと回答していることが有意に多いことが明らかとなった。

表 17 本人の特性とこどもの学校生活の状況

	本人の特性	カイ二乗値(自由度),p 値, 有意差
が 楽 し く な い 学 校 生 活 の 状 況	新しい場所や場面が苦手である	12.74(1), 0.000, ***
	人と話すことが苦手である	15.73(1), 0.000, ***
	人の話を集中して聞くことが苦手である	8.17(1), 0.007, **
	感情をおさえられないことがある	23.84(1), 0.000, ***
	体を動かすことが苦手である	23.20(1), 0.000, ***

3) 本人の捉えている特性と相談できる相手の有無

本人の各特性に対して、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と回答した方が、自分の悩みについて悩んでいることを「相談相手がない」もしくは「だれにも相談したくない」、「わからない」と回答していることとの状況を分析した。有意差が認められたもののみ記した(表 18)。新規場面の苦手さ、感情のコントロールの苦手さ、人と話すことが苦手な場合、相談相手がないことが有意に多いことが明らかとなった。

表 18 本人の特性と悩みを相談できる相手の有無

	本人の特性	カイ二乗値(自由度),p 値, 有意差
相 談 相 手 が い な い	新しい場所や場面が苦手である	7.37(1), 0.007, **
	人と話すことが苦手である	15.74(1), 0.000, ***
	文章の読み書きが難しい	3.50(1), 0.077, †
	感情を抑えられないことがある	10.74(1), 0.002, **
	体を動かすことが苦手である	8.96(1), 0.004, **
	計算が苦手である	6.40(1), 0.013, *

4) 学校生活の状況と相談できる相手の有無

学校生活について「どちらかと言えば楽しくない」「楽しくない」と回答している方が、自分の悩みについて悩んでいることを「相談相手がない」もしくは「だれにも相談したくない」、「わからない」と回答していることとの状況を分析した。悩んでいることを「相談相手がない」、「だれにも相談したくない」、もしくは「わからない」と回答している方が、学校生活について「楽しくない」と回答していることが有意に多いことが明らかとなった($\chi^2(1)=8.96, p<.01$)。

5) 家庭での安心感と相談できる相手の有無

「あなたは、家庭でゆったりと落ち着いて過ごすことができますか」の問いに対して、「いつも、落ち着いて過ごすことができる」「だいたい、落ち着いて過ごすことができる」「あまり、落ち着いて過ごすことができない」「まったく、落ち着いて過ごすことができない」の4件法で回答を求めた。「いつも、落ち着いて過ごすことができる」「だいたい、落ち着いて過ごすことができる」は、「落ち着いて過ごすことができる」、「あまり、落ち着いて過ごすことができない」「まったく、落ち着いて過ごすことができない」は「落ち着いて過ごすことができない」の2つのカテゴリーで分析を行った。悩んでいることを「相談相手がない」、「だれにも相談したくない」、もしくは「わからない」と回答している方が、家でも「落ち着かない」と回答していることが有意に多いことが明らかとなった($\chi^2(1)=18.03$, $p<.001$)。

6. 中学校を卒業した方本人

1) 本人のとらえている特性とそのことに対する専門家への相談の有無

本人の捉えている各特性に対して、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と回答した方が、学校の先生や役所の相談窓口にご相談したかどうかの状況を分析した。有意差が認められたもののみ記した。本人が「文章の読み書きが難しい」と回答している方が、「学校の先生や役所の相談窓口などに相談したことがある」と回答していることが有意に多いことが明らかとなった($\chi^2(1)=9.08$, $p<.01$)。本人が「計算が苦手である」と回答している方が、「学校の先生や役所の相談窓口などに相談したことがある」と回答していることが有意に多いことが明らかとなった($\chi^2(1)=11.42$, $p<.01$)。

2) 本人の捉えている特性と相談できる相手の有無

本人の各特性に対して、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と回答した方が、自分の悩みについて悩んでいることを「相談相手がない」もしくは「だれにも相談したくない」、「わからない」と回答していることとの状況を分析した。有意差が認められたもののみ記した(表 19)。人との会話が苦手であったり、感情をコントロールすることが苦手であったりする場合、相談相手がないことが有意に多いことが明らかとなった。

表 19 本人の特性と悩みを相談できる相手の有無

	本人の特性	カイ二乗値(自由度),p 値, 有意差
相談 相手 が い な い	人と話すことが苦手である	4.55(1), 0.042, *
	人の話を集中して聞くことが苦手である	5.29(1), 0.029, *
	感情を抑えられないことがある	7.30(1), 0.011, *
	体を動かすことが苦手である	14.68(1), 0.000, ***

3) 家庭での安心感と相談できる相手の有無

「あなたは、家庭でゆったりと落ち着いて過ごすことができますか」の問いに対して、「いつも、落ち着いて過ごすことができる」「だいたい、落ち着いて過ごすことができる」「あまり、落ち着いて過ごすことができない」「まったく、落ち着いて過ごすことができない」の4件法で回答を求めた。「いつも、落ち着いて過ごすことができる」「だいたい、落ち着いて過ごすことができる」は、「落ち着いて過ごすことができる」、「あまり、落ち着いて過ごすことができない」「まったく、落ち着いて過ごすことができない」は「落ち着いて過ごすことができない」の2つのカテゴリーで分析を行った。悩んでいることを「相談相手がない」、「だれにも相談したくない」、もしくは「わからない」と回答している方が、家でも「落ち着かない」と回答していることが有意に多いことが明らかとなった($\chi^2(1)=24.96$, $p<.001$)。

考察

今回の調査において、こどもの特性や保護者の特性と相談の有無などの回答から、こどもやその保護者の孤立につながる要因について検討を行った。こどもの特性、保護者の特性、こどもの年齢ごとに困り感や悩みは変化し、それに応じて相談の有無なども変わっていることが窺えた。そこで、今回の調査で得られた結果より、特徴や今後の支援の在り方について以下のこどもへの支援と保護者への支援に分けて記述する。

1. こどもへの支援

1) 乳幼児期

友達とおもちゃなどの貸し借りや、やりとり遊びをすること、感情のコントロールなどができていないと保護者の育児への自信が持てなかったり悩みに繋がったりしていることが分かった。このことから、こどもに具体的に教えていく必要があると考えられる。保育所(園)などの所属があれば、そこでソーシャルスキルトレーニング(以下、SST)などを取り入れて実践できると良いのではないだろうか。所属がない場合には、乳幼児健診の場や子育て支援センターなどみんなが集まる場所、アクセスしやすい場所で、このような悩みがないかどうかの有無を確認したり、その悩みに応じて、対応法を保護者とともに学んだりできる場などがあってもよいと考えられる。SSTも一回教えればできるということではないので、呈示の仕方、ロールプレイを繰り返すことなども丁寧に教えることが重要であると考えられる。できれば、こどもに指導しながらその場面を保護者にも見せて、家庭での般化を期待できるように促せると良い。

2) 学齡期以降

文字の読み書き、話を聞くことができるなど学業に関する事、また、学校や家庭などでの社会性に関わる感情をコントロールすることについて困り感がある場合、相談につながりやすいが、「新しい場所や場面が苦手である」「人と話すことが苦手である」「体を動かすことが苦手である」「工作など細やかな作業が苦手である」ということに関しては、あまり相談に繋がりにくいことが分かった。大した問題ではない、もしくはいつかできるようになるという保護者の楽観的なことも影響として考えられる。しかし、小学校など初等教育においてこのようなスキルの欠如はのちの不登校、ひきこもり、いじめなどの問題とも関連が深く、早期に対処する必要がある。

新規場面の苦手さや感情コントロール、学習の苦手さ、運動の苦手さがある場合には学校生活の充実度に直結することが明らかであった。そのような苦手さを感じる前に個々に応じた支援を行うことが児童期において大切である。本結果は、小学生の保護者の視点であり、本人の捉えとは異なることも考えられるが、こどもを支える大人の視点として、感情コントロールができるようにサポートを考えて行ったり、学習や運動のつまずきをなくすよう工夫することは重要である。

中学生以降になってくると、学校生活の充実度は相談できる相手がいるかということも重要になっていることが本調査より分かった。他の学齡期のこどもを持つ親がこどもの悩みとして高くないが、中学生を持つ保護者は「こどもが良い友人関係を持つことができない」と悩んでいることが多いことが分かった。その関連としては、こどもの特性として新規場面の苦手さ、人とのコミュニケーション(話すこと、聞くことを含む)、感情のコントロールに苦手さがあることが窺えたが、こどもがなかなか相談できる相手が作れない、友人が少ない場合にはきっかけづくりを促すことも必要かもしれない。中学校から教科担任制となり、教科外の人間関係まで支援をすることの難しさはあるが、部活動の顧問、担任、特別支援コーディネーターなどの教員が協力連携を行うことで、サポートの方法を工夫することができると考えられる。特に家庭においても相談相手がない場合には、急務であるといえる。読み書き計算が苦手であったり、人とコミュニケーションをとるのが苦手であったり、感情のコントロールが苦手であったりすると相談相手がない、相談したくないと捉えていることが有意に多いことも明らかであった。思春期の発達課題に直面することで余計に他者に相談しにくくなることも考えられる。気軽に相談できる雰囲気作りが家庭も学校の場所や人でできると最も良いのだが、そうではない場合においては、担任、養護教諭等が中心に行う学校のアセスメントを基に、カウンセラーもしくは外部の相談機関、医療機関との連携も重要となる。

2. 保護者への支援

1) 乳幼児期

こどもの育てにくさ、困り感などがあっても乳幼児期の保護者は、こどもの要因ととらえるのではなく、保護者自身ととらえている傾向がみられた。このことから、相談までの繋がりにくさや孤立していることもあるのではないかと考えられる。そのため、特に乳児期に関しては、子育て支援センターなどで頻繁にこどもを介して保護者や保育士などが一緒に話ができる場の充実が必要であると考えられる。

保護者に初めての場所や場面の苦手さがある場合、そのような場所にも行くことすらできていないことが考えられる。全乳幼児を対象とする乳幼児健診の問診の場で、問診票の記入だけではなく、ちょっとした困り感に対して相談ができる雰囲気作りも行う必要もある。健診の場で待ち時間が発生する場合には、その待ち時間を利用してこどもとの関わり方をミニ講義式で聞けるのも良いと考えられる。健診など多くの人が集まる場所で、子育て支援センターの雰囲気や取り組みの内容が分かるような写真などを多く入れた新聞または、動画などを見せるなどできると、少しは敷居が低くなるのではないだろうか。また、母子保健推進員などの活用により、健診の場所で声掛けを行ってみるのも良いのではないかと考えられる。人の多く集まる乳幼児健診、子育て支援センターなどで、こどもへの読み聞かせの意義、大切さ、方法、タイミング、愛着の形成から語彙修得、就学までつながっていることも繰り返し伝える必要があると考えられる。具体的にやり方などもデモンストレーションをして実際に一緒に親子でやってみるなど体験型にすることで、日常での取り組みに繋がりがやすいと考えられる。加えて、年齢やその子の好みなどに合ったおすすめの本などの紹介、リスト化して配布する、健診の場所などで実際に手に取ってみることができるなどの工夫もしやすいのではないかと考えられる。

特に保育所(園)幼稚園などに所属をしていないこどもを持つ保護者に対しては、手厚い支援が必要であると考えられる。かんしゃくをおこしやすい、話を聞かないなどと所属をしていないこどもを捉えている保護者が多くいることから、親子で長く過ごしていることで実際よりも余計にかんしゃくや話を聞かない様子がひどいと捉えやすいこともあると考えられる。保護者に育児ストレスが高くなっており余裕がないことも考えられる。また、3歳児神話など「3歳になるまで母親が育てなければならない」と捉えている方も少なからずいることが窺える。そのような場合、一時保育やファミリーサポートなどの利用を周知させるだけでは、十分でないこともあるため、レスパイト的な利用によって後の親子関係も良好になることも併せて周知させること、所属がない場合にも積極的に利用を勧めるなどのサポートも必要であると考えられる。

2) 学齡期以降

保護者の意識としては、学校で見てもらっているという感覚が強くなるからか、あまりこどもの特性や保護者の特性での相談の有無などには影響を及ぼしておらず、こどもの年齢が小学生より中学生、中学生より中学卒業の方の保護者がこどもについての相談をすることが減っている様子であった。本調査は、こどもの生活等に関して保護者や本人を対象に行った調査なので、学校現場からの意見を考慮することはできないが、自由記述などでは学校に関する要望(指導や対応)、教員から児童へのかかわり方についての提言が多く記載されていた。本報告書ではそのような自由記述の分析を行うことまではできなかったが、学校に対する要望、期待は大きいからこそであると考えられる。学校教員の多忙な状況も日々の報道等で承知の上ではあるが、家庭とのやりとりを丁寧に行うことも大切である。一方的に、こどもの学校や学級での困り感のみを伝えられると、やはり保護者としても防衛したくなることは容易に想像できる。そうではなく、家庭でのこどもの姿や将来への思いを丁寧に聴き取り、その中で保護者が子育ての困り感などがあれば、共感的な態度で聴き取りを行う姿勢を作ることができれば、こどもの育ちに対して共通の目標を立てやすいのではないだろうか。